

小松町と周辺の産土社うぶすなしゃ



小松城鎮守であった菟橋神社（諏訪社）の社殿

小松市域に所在する町や村の産土社（氏神）には、延喜式内社などの由緒をもつ古社もあったが、江戸時代におい

て社頭の姿を整えたものが多かった。

寛永十六年（一六三九）六月、加賀三代藩主の前田利常が、嫡男光高に藩主の地位を譲って小松城に隠居すると、城内の修築に加え、寺社の造営や小松町の整備がはかられた。

それまで小松城鎮守として城内に鎮座していた小松菟橋神社（諏訪大明神）は、慶安四年（一六五二）に現在地に移され、町の中心部付近を流れる九竜橋川の以北（橋北）を氏子区域とした。また中世本折村の産土で藩主前田家の祈禱所とされた小松本折山王社（石部神社、現本折日吉神社）は、九竜橋川の以南（橋南）が氏子区域であった。

近世の小松町を二分する両社の春の祭礼は、菟橋神社が四月十五日、本折山王社は四月中の申の日で、ともに神

輿が御飯屋に遷座した後、町内を巡幸したことから「お旅祭り」とも呼ばれた。また十八世紀後葉からは、それぞれの氏子町から曳山が出て、子供歌舞伎も上演され賑わった。

小松町南端の三日市町地方に鎮座する小松多太神社（八幡宮）は、中世石清水八幡宮の末社「八幡別宮」の由緒をもち、前田家の祈禱所であった。木曾義仲が奉納した平家の武将斎藤実盛の甲冑を所蔵することから、幕府巡見上使や時宗の遊行上人などが立ち寄って社参し、それを拝観・供養するのが恒例となっていた。また同社の南方にあたる須天村の熊野社（現須天熊野神社）は、前田利常に祈禱札を献上して、社家の居屋敷を拝領したとされる。

安宅浦の住吉社（現安宅住吉神社）は、



小松城の産土神とされた葭島神社(五穀寺稲荷宮)社殿 正保元年(1644)に城内から現在地に移った。



須天村の産土である須天熊野神社



弘化4年(1847)「石部神社(小松山王社)御祭礼行列之次第」部分(本折日吉神社所蔵)

源義経・弁慶の「勧進帳」の舞台で有名な産土社で、江戸時代後期には、社殿修復に際して、しばしば金沢城下町に出向き、野町神明宮や山ノ上春日社(現小坂神社)の社頭で、「臨時神事(出開帳)」を催していた。

こうした小松町周辺の菟橋・小松山王・多太・須天熊野・安宅住吉の各社は、いずれも神主支配の神社で、それらの

社家の歴代は、江戸期を通して京都の神祇管領・長上の吉田家から神職装束着用や神道行法の許状類を得ていた。

また社僧支配の神社としては、泥町の稲荷宮(現葭島神社)と小松天神(現小松天満宮)が知られる。稲荷宮は、前田利常の招きで、元能登石動山の衆徒であった宝光院祐長が、小松城地の産土神であった同宮の別当となり、や

がて本山派山伏の五穀寺と称し、小松の山伏頭となった。江戸中期以降は、三三年毎に同宮に安置する仏神の居開帳を行っており、小松町の神仏習合の中心的存在であった。小松天神については、前田利常が京都の北野社を小松の地に勧請し、別当として招かれた能順の子孫が梅林院と号して、藩主前田家の尊崇が厚かった。(東四柳史明)